

龍南會雜誌第九拾三號

論 說

和漢交通起原

教授 武 藤 虎 太

説

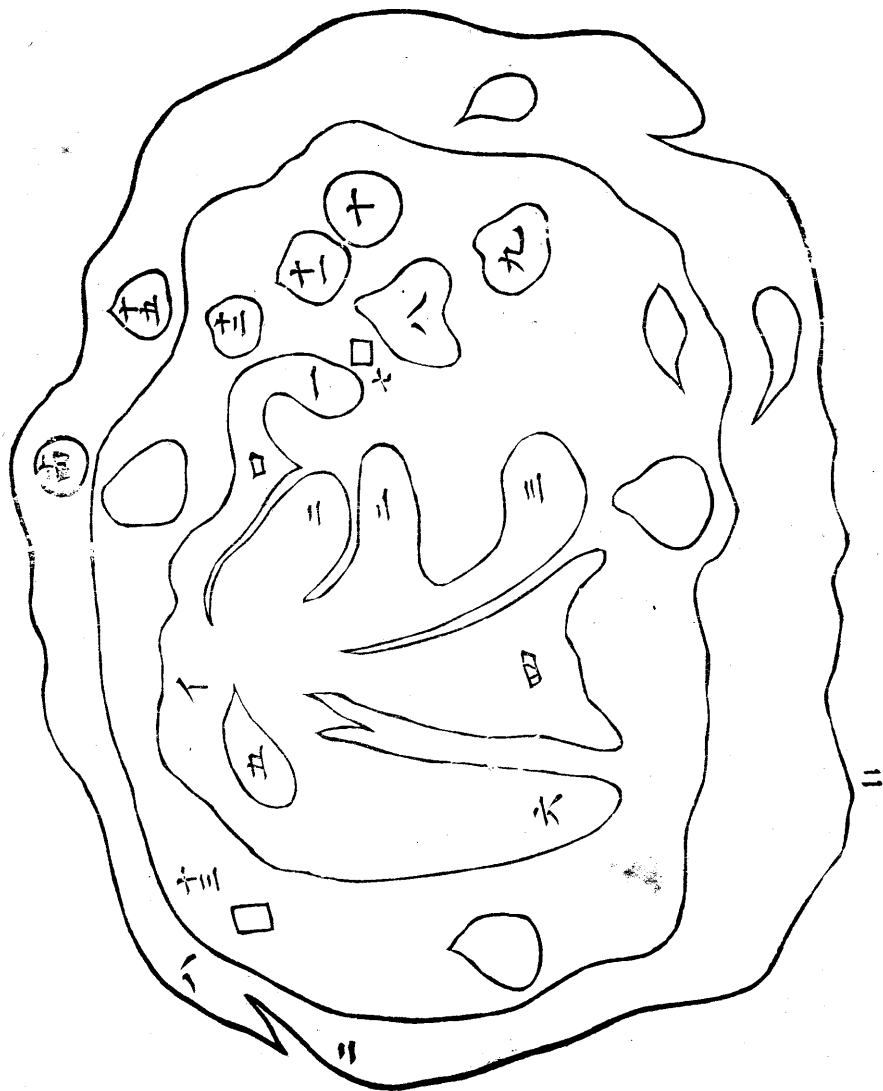
論

吾れ嘗て朝鮮古代の世界地圖を一觀して、深く人智の進歩に感ずる所あり、朝鮮は東洋の貧弱國にして今尙人文未開の評を免るる能はず、而も今を距る一千年前、歐州に於て未だ新世界の發見有らざるに先ち、既に全世界の觀念有りしは、寧ろ驚くべきものあり、念ふにコロンブスの米國を發見するや、實に西曆千四百九十三年に在り、是より先き二百年、以太利國ウエニスの旅行家マッコ、ボロハ、既に亞細亞大陸を旅行して、漸く東洋地理の思想を歐州人に與へ、而して其淵源に溯れば、實に西曆七百四十八年頃、ウァーヅリアスガ、吾人立脚の反對地にも、別に世界ありて人種之に住むとの想像説に濫觴せずんば有らず、蓋し人智の進歩する、一日の故に非ず、則ち朝鮮人地理思想の淵源する所、亦實に深く且つ遠きを知るに足らん。』

支那は東洋の大國なり、建國最も舊く、人文夙に進む、其の地理思想の發達、外交交通の事業、亦豈に然らざる有らんや、而るに從來和漢の交通を論ずるもの、多くは前漢の武帝を以て之が始とす、管に之のみならず、遂に之を疑ふて、更に後漢の光武を以て其の交渉の起原と爲すに至る、亦既に遅からずや、天皇地皇は遠し、庖犧氏出て、地を住、宿、須句、顓臾等に開き、支那の源流を作れり、即ち古の魯の地にして、泰山四近の地なり、神農氏に至り大庭氏と稱す、亦魯の曲阜地方なり、

朝鮮古代之世界圖

據矢津昌
永氏所藏
傳云
古圖
一年前



一朝鮮、黃海に突出す

二支那、左右に黃河揚子江を帶ぶ

三安南、東京灣を抱く

四蕃胡、即ち印度

五歐亞界なる裏海

イよりロに及ぶ向は西比利亞

四と六との間は紅海

六西域、即ち今の亞米利加地方に及ぶ

七日本とあるも或は對州ならん

八九州

九廣桑と有り或は琉球なるへしと云

十四國

士本州

三北海道ならんか、但し原圖之を示さ

す

三白民、即ち今の英國

ハとニとの間は巴奈馬地頸なるか

西五北米の北部大湖地方の沼澤の地、

圖の周圍を繞れる陸地へ、南北亞米

利加を指すならんか

黃帝起るに及び、炎帝と版泉の野に戰ひ。蚩尤を逐鹿の野に誅せしを見るに。(久米氏云炎帝と蚩尤とは同一人なるべし)今の直隸省保定府にして、版圖は稍東北に延ひたり、高陽氏は高陽(河南省開封府)帝丘(直隸省大名府)に都し、高帝氏は亳(河南省河南府)に都せり、是際支那の本土は、黃河の南北、泰山四近の地に限り、境域極めて狭く、僅に彈丸軌子の地を開拓したるの觀あるも、降て帝堯に至り、平陽(山西省平陽府)に遷都し、越裳氏は遠く交趾の南より來り、頗る疆域を廣

くせし際、洪水氾濫して下土を水にし、陵谷を汨し、大雨九年、治水の効果に由り、天下安堵せると同時に、支那の封域は著しく四方に擴まり、所謂九州の地は、殆ど後世の支那帝國版圖を劃せしのみならず、雍州、青州等東南の諸州は、遂に島夷塞外の地をも相率て、其交渉に伍せしむるに至れり。

島夷既に支那交渉に入る、而して其中、倭韓等をも包有せる事は、後段論する所に由て自ら明瞭なるを得ん、蓋し日本の事、堯舜の時既に略々其地を知られしも、當時は只島夷と稱する、空漠たる名稱の下に一括せられたり、今假に之を名けて島夷若くは東夷時代の日本と稱せん、斯くて陶虞夏商を経て、周に至り、本邦の事漸く支那の知る所となり、貢獻を納むるに至りしことは、往々史乘に散見する所、貢獻の字少しく誇張に失せり、或は交通なるやも知る可らず、而して倭と稱する一種の名目は上代より漸々浸潤し來れるものゝ如し、之を倭人時代の日本と稱すべきか、降て漢の武帝朝鮮を征するに及びては、對岸の日本、豈其耳目に漏る、を得ん、果然、歲時を以て來獻見す云々の文さへ、漢書に見へ、是より東漢三國を經、魏晉時代に至る迄、交通常に絶へざりし事は、彼書に散見する所に由て、之を知るを得可し、然れども當時の倭國は、僅に是れ九州西偏の諸國、各私に通交するもの、固より皇命に非ず、されば此時代を稱して西偏の倭人通交時代の日本と稱すへし、斯て推古帝の十五年、小野妹子を隋に遣はせし以來、本邦と彼邦との、正式の交通始めて開け、對等の交際茲に始まる、是より唐床元明に至るまで、時には九州西偏の無賴亡命の徒、彼れの邊境を掠略して、所謂倭寇の名を受たると多きも、要するに隋以來對等正式の交際は創まれり、之を對等交際時代の日本と稱す然らば則本邦の彼國と通交する、自ら四時期に分つを得へし、但後二期は典籍

頗る多く、世人の知悉するもの亦多し、今試に前第二期の交渉を尋繹せんと欲す、然れども史料甚だ少く、殊に古史の濫晦不啗なるは、何れの國と雖も皆同し、況んや余の淺學寡聞なる、事實の考證に缺くる所あり、推理斷定に誤る所亦多からん、然れども由て以て古代和漢交渉起原講究の端緒を啓くを得は、蓋し亦望外の幸なり。

第一章 東夷時代

第一 東夷

第二 島夷

第三 常世國

第二章 倭人時代

第一 倭

第二 委奴國

第三 秦人通交

第四 漢土通交

結論

第一章 東夷時代

(エラス) 希臘の始めて國を地中海の半島に建るや、荷も同族人種に非る者は、盡く目するに野蠻人を以てし、當時の開化國たる、埃及、比耳西亞をも、蠻國たるシシアゴールをも、盡く目するに野蠻人を以てしたり、則知るバーハリアンとは、唯自他を分つの稱にして、文野を分つの謂に非るを、然れども

時を經るに従ひ、希臘の文明は、嶄然頭角を四隣に見はしたるより遂に野蠻の意に變したるのみ、念ふに支那の古より自ら稱して中華と云ひ、四隣列國盡く目するに蠻夷戎狄若くは化外の地を以てしたるも、亦唯此の如きのみ、當時の蠻國中、豈に大に考ふ可きもの無らんや、今南蠻北狄及び西戎は暫く措き、殊に東夷の起原を尋釋せん、

第一

東夷

東夷の事、其の始めて典籍に見へたるものは、尙書堯典なりとす、其文に曰く。

乃命羲仲宅嵎夷^⑤、日暘谷寅賓出日、

孔安國の傳に、東表之地稱嵎夷と見へ、後漢書には、嵎夷を以て朝鮮の地と爲す、蓋し朝鮮の地、古へ青州に屬し、山東の登州府とは、一葦帶水を隔てゝ相對す、乃ち嵎夷は是れ朝鮮の地を云ふならん、(尙書地理今釋)且つ朝鮮は、成山の東に在れば、日晷を觀測するに適當の地なる事は、元史天文志に、

四海測景之所、凡二十七、東極高麗、西至溟池、南踰朱崖、北盡鉄勒、皆古人之所未及、按高麗即古朝鮮北極、出地三十八度與登州同、後世朝鮮爲外國、測景但可在登州、堯時嵎夷爲青域、測景自當在朝鮮也。

されは嵎夷の地を以て、朝鮮地方とするは、諸家の説く所大抵相同しく、又尙書にも合す、但堯の時草萊未だ開かず、封土未だ拓かず、而して遠く遼東朝鮮の地に及ぶは、頗る奇異の感無き能はず、是故に遼東地方は、古へ青州に屬せすと云もの多し、然れども禹貢に海岱惟青州とあり、傳に曰く東北據海、西南距岱。

と其據海と云者は、禹貢錐指正義に、東萊之縣、浮海入海曲の間、青州の境、非海畔而已、故言據とあり且つ夫れ青州の東、蔡萊二者の地は、遠く大海中に斗出し、東西長さ八九里、其遼東地方とは、僅に一内海を隔つるのみ、又東史纂要、及び三國遺事等に據るに、

檀君唐堯戊辰歲都平壤、國號朝鮮、後徙都白岳云々、とあり、檀君の事、國初開闢の談に屬し、輒く信す可らざるもの有りとも雖も、亦古來の傳説、直に抹殺す可らざるものあり、籍て以て堯の時以來、朝鮮が既に傳説を有するの傍証と爲すに足らん、されは堯の時青州^⑤は海を隔て、遼東地方をも有せしか、舜の十有二州に分つに及び、海を越ては不便なりとて、青州を分て營州を置きしなり、因て念ふに、遼東地方は中國を距る既に遠く、當時舟楫の利未だ能く開けざるを以て、東方の境界線に至りては、自ら漠として劃然たる疆界線無く、且つ治化も行はれ難きが爲め、遂に分裂の必要に迫りたるならん、則ち嶠夷の地は單に遼東朝鮮地方と定めて可なるに似たり、嶠夷の論略々定まらば、其東夷との關係は如何、

蓋し東夷に九種あり、爾雅釋地には、後漢書の東夷傳を引て、昧夷、干夷、方夷、黃夷、白夷、赤夷、玄夷、風夷、陽夷、の九とし、又一説に玄菟、樂浪、高麗、滿飾、鳧更、索家、東屠、倭人、天鄙、の九を云とあり、禮記明堂位の篇には、九夷之國、東門之外、西面北上、云々

と見へ、九夷の目は、後漢書の説に由る、其他竹書紀年、圖書編等頗る多し、然れども亦白玄黃風陽等何に由て命名せるや、單に名目を擧ぐるのみにては、其地理更に解し難し、竹書紀年の如きは、別に藍夷と稱するもの有り、是れ將た何れに屬すべきや、頗る疑ふへし、但范史には、東夷九種を以

て嵎夷とし、杜氏通典も亦其説に據れり、通鑑唐高宗顯慶五年の條に、
命蘇定方伐百濟、以新羅春秋、爲嵎夷道行軍總官、と有るは、是れ亦東夷を以て嵎夷とせるなり
又後漢書には。

漢元封三年滅朝鮮、分置四郡、至昭帝始元五年、罷臨屯眞番、以並樂浪玄菟、玄菟亦徙に居句驪、
自單大屯已東、沃沮濊貊悉屬樂浪、

と、されば此に郡の地、東大海に至る、皆古の嵎夷なり、(禹貢錙指)本邦にても、三善清行は九夷を以
て日本の事と解せり、(本朝文粹)然らば則是等の説は、皆爾雅に引きたる第二説の、一部を取捨したる
ものゝ如し、竊に按するに、范史以下の謂ふ所は、僅に其の一部に止り嵎夷は却て是れ東夷の一部
分には非るか、爾雅に擧げたる第二説には、玄菟樂浪高麗等をも含む、而して是等各國の嵎夷たる
は、前説に述べたるか如し、然らば則東夷中には、嵎夷以下索家東屠倭人天鄙等をも含むに似たり
、且夫を漢書に

東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼道不行、設浮於海欲居九夷、有故也夫、

と云ひ、其下直に

樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見、

と有るを見れば、所謂倭人も亦九夷、即ち東夷の内に包含せらる(倭人の事後段詳論)又後漢書の東
夷傳には、

東夷率皆土着、喜飲酒歌舞、或冠弁衣錦、器用俎豆、所謂中國失禮、求之四夷者也、
と有り、之を倭人其他東夷の事を記せる土俗に比するに、甚だ相類するものあり、されば東夷は雷

に嶠夷地方、即ち玄菟樂浪等のみに止らず、猶幾多の夷人をも包有せること明なり、況んや嶠夷にして既に其遼東朝鮮地方たるを知らば、之と一葦帶水を隔てたる東海諸島の如きは、天朗かに氣澄むの日、煙雲縹渺の間、或は一髪の青山を、水天相接するの際に望むを得ん、豈敢て風する馬牛も、相及はずと云はん乎哉、然らば則ち嶠夷の中國に入りたるの日は、東南海諸島の中國に知られたるの日なること、固より既に疑を客る可らず、況んや明の漳本清の如きは、明かに日本を以て九夷のひと數へたるをや、

然らば則ち東夷包含する島嶼邦國は則如何、圖書編の古東夷考略には、朝鮮は勿論のみ、倭扶桑侏儒等、其數頗る多し、而して所謂遼東地方中、濊貊高句驪、沃沮、帶方、樂浪、扶餘、挹婁等をも含み、濊國は今の江原道の地（東志纂要）新羅の北界、溟州近傍なり（古今郡國志）高句驪は遼東の東方千里にあり、南は朝鮮濊貊と接す、東は沃沮、北は扶餘に接し、地方二千里に達す、（後漢書）樂浪は辰韓八國を含み、帶方は倭韓等を附屬す漢書斯の如く、東夷中には幾多の邦國を包有するも、今一々之を述ふるに遑あらず、且く倭の東夷に屬するを証して、後段詳論の地歩を拓くのみ、

第二 島夷

東夷を論するに當り、最も緊要なるは島夷なりとす、禹貢に島夷卉服とあり、傳に曰く、草服葛越と、釋草に云、凡そ百草一に卉と名く、卉とは即ち草服葛越なり、葛越は南方の布の名、葛を用て之を爲るとあり、左思吳都賦には焦葛升越弱於羅紉是也と有り、蘇氏の説に島夷績草木爲服、如今吉貝木綿之類とあり、禹貢雖指に

按地理志、樂浪海中有夷人、分爲百餘國、又會稽海外有東鮮人、分爲二十餘國、皆以歲時來獻兒

、盖卽之島夷百草總名卉、卉服殆非一種、去古已遠、不可得詳云々、

十

とあり、然るに漢志には、東鯤は會稽海の外に在り、今の福建東南の諸國なりとし、後漢書の東夷傳には倭は韓の東南に在り、其他盖し會稽東冶の東に在りと、二者共に支那の方位に大差なきも、亦全然別なり、然るに魚豢の魏略に曰く、

倭在帶方東南大海中、依山島爲國、度海千里復有國、皆倭種、盖倭國有二、其在帶方東南者、卽漢之倭人、後漢書所謂倭、在韓東南大海中者也、度海千里復有倭者、卽漢之東鯤人、後漢書所謂大倭王國、直會稽東冶之東者也、東鯤今爲日本、

是に由れば東鯤も倭の一種にして、漢時の倭人ど、後漢書の所謂大倭王國とを別物とし、東鯤を以て今の日本と爲せり、是れ何の據る所あるか、漢志及び東夷傳の謂ふ所既に明白なり、且つ禹貢雖指に曰く、

島夷唯古倭人東鯤諸國、可以當之、

と、是れ全く二者を別にせるなり、韓退之の送鄭尙書帥嶺南序に、

海外雜國、耽浮羅流求毛人夷賣之州、林邑扶南真臘干陀利之屬、東南際天地、以萬數云々、

林邑以下は西南海中に在れば、之を除くも、耽浮羅、流求等、所東南海島の夷と稱するもの頗る多く、流求の如き、元是れ溫暖の郷、芭蕉樹緑にして、葛羅自ら繁し、服する所元より毛皮に非ず、蕉服葛巾、今尙之を用ふ、日本の如き亦麻紵木皮の類等、植物製の服頗る用ひらる、されば卉服を服して支那の沿岸に航し、或は交易或は通交、固より之れ有りしならん、況んや南倭北倭の字、既に山海經に見へたるや、(後段詳論) 禹貢に島夷皮服、夷右碣石入干河とあり(史記漢書には島夷に作

り、鄭康成、王肅亦鳥と稱す、唯孔傳には島夷とあり、唐の初め尙鳥に作りしも、開元中鳥に改めたり、(禹貢錙指註)鳥とは海曲を云へるものにして、碣石は杜佑通典に、碣石山在漢樂浪郡遼成縣、秦長城東截、遼水起於此、遺址猶在云と、又禹貢錙指に、

通典三韓在海嶋之上、朝鮮之東南、蓋卽此所謂島夷皮服者

と、蓋し皮服を以て來貢し、北海より河南に入り、西に轉じて碣石山を右に見るより、斯く言へるなり、(蔡沈集傳)されは此島夷は三韓地方を云ならん、而るに史記に靺鞨を以て島夷に擬せり、括地志に由れば、靺鞨國は古の肅慎なり、故に史記に従へば、島夷は是れ肅慎なるべし、然れども史記に又曰く、

四海之内、咸戴帝舜之功、北有肅慎、東有島夷、

と、されは肅慎と島夷は、全く別種にして、史記の説は自個撞着せるなり、元來島とは海水に回繞されたる一帯の土地を言ふものなれば、北方の肅慎地方の如き、殆ど大陸と同じものは、固より島と稱すべからず、但三韓の地は、是れ半島國なれば、所謂島夷は、

唯倭韓可以當之、獺貂肅慎等國、止東面臨大海、餘皆通陸、不得爲島夷、

と云へる禹貢錙指の論は、妥當なるが如し、且つ日本の北海道蝦夷地方及び朝鮮の北方は、氣候頗る寒冷にして羽毛皮服の類亦當に之れ有りしなるべし、是に於て倭韓二國は島夷として禹の時には既に入貢(入貢と云ふ可らざるも通交來往)せしことは、略々推知するに難ならざるべし、

第三 常世國

翻て之を本邦に徴するに、古事記に伊弉諾尊、月夜見尊に言寄さして、夜の國を知らしめ玉ふとあ

り、夜の國は卽常世國なり、書紀神武紀に、

三毛入野命亦恨之曰、我母及姨並是海神、何爲起波瀾以灌溺乎、則跳穗波而往乎常世鄉矣、

と見へ、垂仁紀には

命田道間守遣常世國、令求非時香菓、今謂橘也、

と有り、此に常世國と云へるは、如何に解し來るべきか、從來諸說頗る紛々たり、本居氏は書紀を引て冥土と解せり、然れども垂仁紀に至り、橘を求めしめ給ひし事より考を起し、更に解して曰く、橘は北方の寒き國には無きものと聞けは、三韓などはいかならん、若韓にはなきものならば、此常世國は漢國を云ならん、

と、諸家多くは此説に同す、然らば則常世國は、支那地方を指すなるべし、而して其指す所は何れの地方なるか、書紀垂仁帝の條に、

萬里踏波、遙度弱水、是常世國、神仙秘區、俗非所臻、

とあり、踏波は古事記の跳波穗と合するなり、弱水は禹貢には雍州に屬せり、卽ち支那大陸の西北、僻遠の地に當る、然れども所謂弱水にも種々あり、漢書の司馬相如傳に、

經營炎火、而浮弱水、

とあり、顏師古の註に、絶遠之水也、乘毛車以度者と解し、更に其地を擧げず、後漢書の東夷傳には、

夫餘北有弱水

と見ゆ是れに由れば弱水は遼東近傍に在るものと如し、書紀の言ふ所、果して何れを指すか詳ならず

然れども田道間守の赴きし常世國は、橘を産するの地たる疑を容れず、考工記に、橘踰淮北而爲枳、此地氣然也、

と見へ、屈原の橘頌には、受命不遷生南國焉と有り、王逸の注に、橘天命を受け江南に生ず、北地に從種すへからず、然らざれば化して枳と爲ると、又史記には、

蜀漢江陵千樹橘

蜀都賦には、戸有橘柚之園と見へ、呂氏春秋には、江浦之橘、雲夢之柚とあり、されは江南荆梁の地は、從來橘柚を産すること知るへし、禹貢にも揚州の産を録して、

厥包橘柚錫貢、

と有り、田道間守の行きし所も、或は福建廣東地方を言へるに非るか、況んや「フヒリン」群島より來れる一道の潮流は、赤道潮流と合して、支那の沿岸を洗ひ斜めに日本海の東南九州四國の沿岸を洗へるを見ても通航の行はれたるや察すべきなるをや、久米氏は弱水を以て珠江なるべしと謂へり、未だ其詳を聞かざれば遽に信憑し難きも、要するに江南荆梁の地たるは疑ふ可らず、月夜見尊の知し召されし常世國は、果して田道間守の赴きし所と同一なるや、未だ明文を見ざるも、從來諸家の説に據れば、遼遠の地方にして漢土地方を指すなるべし、されば本邦の古代に在て、既に漢土と交渉の端を啓きしは自ら明白なり、唯月夜見尊の事、遠く神代に在り、邈として年紀を定め難きも、其本邦開闢の始めに在るを見れば、支那に於ても頗る上世に屬すること、推知すべきのみ、則ち是れ亦日漢交通の、遠く上代に在りしことを証するに足るべし

(未完)